

十月の俳句

(2020年10月)



た べ も の 俳 句	モ ー ロ ク 俳 句	歳 時 記 俳 句	目 次
16 ＼	10 ＼	1 ＼	

< 神無月（かんなづき） >

10月（旧暦）は、八百万（やおよろず）の神様が人々の運命を話し合うため、全国から出雲の国へ出かけることから、和名を「神無月（かんなづき）」といいます。神様をお迎えする出雲では、「神在月（かみありづき）」といわれています。

（宇佐美保幸）メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに
巣鴨とげぬき徒然俳句

<https://blog-haiku.777usami.com>

譲られて優先席へ神無月
道端に錆びた自転車神無月

豊の秋柿の葉寿司に大吟醸
こけし達泣いて笑って豊の秋
椋鳥が駅前木立を寢床にす
椋鳥(むく)大群駅前汚し人汚し

金箔が揺れるごとくや秋の蝶
携帯の基地局高く空高く
空高しベビーカーも空に向き
天高し認知症なり何処の誰
秋空へゴルフボールは星になる
妻のいぬ時に陰口天高し
考えもせず落ちればすべて銀杏や

杉林伐採印秋の風
友達と恋人の間秋の風



熟れ熟れて美男葛は誰に恋
金木犀剪定きつく花付けず

夜長です宇宙は爆発繰り返す
夜長しバツハを聴けど寝つかれず
父母の遺伝子嫌う長き夜
長き夜にブラック珈琲ブラームス
秋夜長男決まってブラックを
秋夜長酒は飲め飲め早く死ね
本を読み言葉を探す秋夜長
アレクサと延々話す夜は長い
立ち飲みのはしごを重ね夜の秋

むなしくも血の色変化葉鶏頭
ピラカンサスなぜ食べられぬ赤き実を
天狗鼻曲がり曲がって唐辛子

大菊や手塩をかけて嫁にだす



断捨離や部屋に光が菊日和
カフエ男子男同士の秋日和

鰯雲校歌に称ふ遙照山
鰯雲飛行機雲に切られたり
免許証やめたころんだ鰯雲
飛蝗群れそこに飢餓ありアフリカは

マンボマンボマンボの後の流れ星
流れ星それを拾った夢を見て
流星を見上げる頬に夜風あり
都会にも流星しきりなる夜あり

長き夜やゲームの依存症
長き夜やパワプロゲームホームラン
夜長しジャズをつまみにウイスキー
パソコンと会話をしている夜長かな
親離れ告げるメールの夜長月



秋の蝶探しものなら交番へ
改めて悲喜哀楽の秋の蝶

とげぬきのお顔を洗う秋の雨
年ごとに寂しき気配秋の雨
秋雨の水面のダンスフラミング
裸婦像に恵みを与え秋の雨
温暖化秋の雨さえ凶暴に

かの世では菊作りして過ぎましたし
沈黙し毅然と起立菊の白
群青の鉢に一本白き菊
菊人形展示の後は火刑され

蓑虫はモーロク知らずぶら下がる
蓑虫も泣くことあるか子供無く
割り切って生きて蓑虫ぶら下がり
蓑虫は孤独なれども哲学者



我が庭の金柑熟れて野鳩来る

コーラスの声もそろって秋日和

庶民には高嶺の秋の物産展

北海道真つ直ぐ真直ぐ秋の道

寝台特急女子乗せ秋の出雲路へ

おれ男飲んでまた飲み眠る秋

スタバにてカフェラテ片手秋の雷

秋の日のとげ抜き地藏笑み返し

ままごとのセレブになって秋うらら

秋の雲スカイツリーのさらに上

秋の灯を消してバツハをひたすらに

イヤホンのコードもつれて秋ひとり

本開く本読むふりの秋のカフェ

燃え上がる赤一色にななかまど



考えて迷って生きてななかまど

噴煙のたなびく山も紅葉し
それはそれ化粧のごとく紅葉し
紅葉にも色に格差が世の常か
紅葉に雅にまりが「けまり祭」
紅葉の陰より人生陰りゆく

何度見た「阿弥陀堂だより」紅葉散る
紅葉狩りアートも楽しむ美術館
花水木いの一歩に紅葉なり
我が庭のあじさい紅葉いい感じ

柿紅葉絵を描く人を困らせる
柿紅葉混ざり合う色困惑す

日々変わるいずれ枯れゆく草紅葉
いつの間に隠れ行く前草紅葉



つかの間の桜紅葉は散り急ぐ
庭紅葉まだらに染まりこれも良し

爪を噛むミステリーを読む秋の暮
ため池に石を投げ込み秋の暮

哲学者人間とはと秋の暮れ

秋の暮れ雨過ぎすなり立ち飲み屋

秋の暮れ雨宿りする立ち飲み屋

ゆく秋の団地おだやか高坂や

ビニールの傘をすべつて秋が逝く

秋深し吾に潜みし阿修羅像

奥秩父皆冬近き山姿

ヒートテック毎年増えて冬隣

山寺でスマホ使えず冬隣

山寺で鈴の緒を振る冬隣

快晴といえど日差しは冬隣

冬隣けなげに咲いて霜柱



レンタルの投函冬隣
冬隣薬としての赤ワイン

デッドライン東京の夜秋の闇
秋声のしきりなる日もブログ書く
秋麗ら皇居一周ブラ歩き





モ一ロク俳句

十月やモ一ロクまなこ風の中
モ一ロクし何度も聞かむ栗ご飯
モ一ロクし持病も増えてとろろ汁

キリギリスモ一ロクするなと鳴きやまず
うかうかとモ一ロク重ね朝の虫

翳雲モ一ロクすればうざつとい
翳雲モ一ロクすればただの雲
手本なきモ一ロク世界翳雲
モ一ロクし揺り起こされて翳雲

神在りしモ一ロクすれど天高し
モ一ロクし生きる吾には空高し
天高しわたしモ一ロク何処の誰



年相応やはりモーロク秋の空

モーロクし父よ背高泡立草

モーロクし先を憂いて月夜茸

モーロクし魂離れて月の萩

モーロクし全部捨てれば月の萩

モーロクし声を落とせよ雲は秋

モーロクしちよつと言い寄る雲は秋

モーロクし嘆き懐かし秋の雲

まなざしがモーロクその先翮雲

モーロクし逃避ばかりの秋の蝶

秋蝶に好かれモーロク誰ならん

モーロクし肉うすき肩秋の蝶

モーロクし脳みそに吹く秋の風

何一つ出来ずにモーロク秋の風



秋の風モーロク人を見つけたり
モーロクと指摘をされて秋の風
モーロクし秋風かよふ耳や鼻
秋風の下にモーロクほろほろ鳥

尖るもの多きモーロク十三夜
モーロクし闇生き生きと十三夜

モーロクし夜長の橋と覚悟して
長き夜をモーロク進み猫と酒
長き夜にモーロクすれば鼓動聞く
鬼平犯科帳モーロクすれど長き夜は

じやんけんに負けてモーロク烏瓜
ひだまりにねむくモーロク烏瓜
モーロクしすぐに傷つくからすうり

モーロクし空高すぎる秋思かな



モーロクしたただ流れゆく秋の川
モーロクし切りすぎ傷む爪の秋

柿すだれモーロクすればひきこもり
渋柿や惚けてモーロクうば捨てに
モーロクし鼻歌多し柿の秋

モーロクし重労働の栗をむく
友情もモーロクすれば花カンナ

モーロクし年相応な秋の空
モーロクし決断できず秋の空
昭和昭和既にモーロク空高く

おのずから菊も壊れてモーロクす
モーロクし何を愛するワライダケ
モーロクし口開けたまま通草の実



稻妻とモーロク頭光り合ふ
リンゴ剥くロボット欲しきとモーロクす
モーロクし何度も自慢林檎剥く
限界とおもいモーロク草の花

モーロクしさびしさ満ちて秋の暮
秋の暮あやまちばかりモーロクす
物忘れモーロク忘れ秋の暮れ
モーロクし激せし人に葉鶏頭

秋白しモーロク頭また白し
死を待てるモーロクすれば秋の川

芒原モーロクすれば寝るばかり
モーロクし我も芒となりにけり

晩秋の空はたいくつモーロクし
晩秋やモーロクすれば落ち込んで





晩秋のモーロクすればたいくつし
力尽きモーロクすれば秋が逝く
モーロクし子の名を忘れそぞろ寒



たべもの俳句

天井を大粒ダイヤ新米で
新米におかかのり弁昭和かな
とにかくも楽しむ気持ち今年米
新米に京の漬物お味噌汁

マカロンが胃に落ちてゆく昼の秋
雲は秋あんパン執着自己愛と
あんパンをお供に秋の街散歩

秋風やレトルトカレーでカツカレー
飛蝗飛ぶレトルトカレーの夕ご飯
秋夜中一人カレーの裸かな

椎茸をただ焼くだけのレシピかな
椎茸を焼いて醤油をちりりかけ



落花生好きで大学進学す
落花生どこが真面目か哲学者
落花生皮つきこそとこだわりし
とりあえず落花生なりコップ酒
おつまみにとりあえずだす落花生

「レモン哀歌」智恵子の命香気かな
檸檬など二三並べてインテリア
レモン切る国産レモン愛国者

鰯雲お昼は妻と鉄火巻き
生姜剥く刻む庖丁選びけり

秋風に揺れるシシヤモのすだれかな
べつたらは一年一度のお漬物
幾年の石臼廻る新蕎麦や
自然薯をおろして豊か&とろろ蕎麦



奥会津新そば前に「そば口上」
新そばの香り楽しみ腰の粘り

りんご掌に誰にぶつける赤の闇
稲光皮を破って焼き餃子
敬老の日自分で作る卵焼き
だし効かせ敬老の日のだし卵

コリコリの砂肝焼いて秋の暮れ
牛井を食べて哲学秋の空
厚切りのポテトチップス秋の風
飯時は毎日また来て秋夕餉

ブログ書き一日終わる柿熟れる
柿便り日本全国柿日和
さつまいもやさしいごはん芋ご飯

栗ご飯炊ける彼なら文句なし



栗を剥く夫婦二人は疲れ果て
栗をむくただひたすらに夫婦して
栗ご飯仏頂面が消えてゆく
焼き栗の薫る香りに足止まる

苦き顔わざとらしきに温め酒
ぬくめ酒孤独死忘れ演歌聴く
コップ酒身に入むなり老いぬれば

サバ缶のアヒージョ必須唐辛子
豚カツに赤き柚味噌香氣かな
豚カツを噛み切れずをり天高し

グリーン車に匂う豚まんのぞみ号
秋澄めり味噌ラーメンと餃子かな
秋土用みそラーメンに餃子かな

海老フライ真っ直ぐ伸びて天高し



エビフライ大ご馳走だ運動会

長芋のソテー岩塩振りかけて

長芋の短冊切りに吟醸酒

長芋を山葵醤油でひとり酌む

年取れば持病も増えてとろろ汁

シユラスコの肉の火まみれ黄落期

くるくると野菜肉巻き黄落期

秋暮るるせいろ一枚酒二本(自作)

行く秋やポテトサラダをカレー味

行く秋や厚揚げ焼いておろし添え

とり混ぜて野菜のスープ冬隣

昼めしは立ち食い蕎麦で冬隣





